



# 健康会だより

＜主旨と理念＞

長谷部式健康会は『自分の健康は自分の努力で』をスローガンに健康普及活動をしている会です。健康は人生最高の宝です。世界人類の健康と平和に奉仕しましょう。『体質別』は健康を守る自然の法則です。

発行所 長谷部式健康会 総本部

〒491-0905

愛知県一宮市平和1丁目2-13

発行人 長谷部茂人

発行部数 3000部

TEL 0586-46-1258

E-mail kenko@world.interq.or.jp

HP <http://www.interq.or.jp/world/kenko/>

## 信じる医療 疑う医療

【洋書】  
文字は小さく左から右へ書いている



【竹取物語】（龍谷大学所蔵）  
文字は大きく右から左へ書いている



「われわれは横に左から右に書く。彼らは縦に、いつも右から左に書く。」（ルイス・フロイス）

### なんでも あべこべ

安土・桃山時代、イエズス会の宣教師であったルイス・フロイス（1532-1597）は、35年間日本で布教に努め、その間、自分が見たヨーロッパと日本の文化の違いを書き記しています。

- ・ 我々の蠟燭はもとが太くて先が細い。日本人のは先が太くてもとが細い。
- ・ 我々は普通に小麦製のパンを食べる。日本人は塩を入れずに煮た米を食べる。
- ・ 我々はごとく（三脚架）を置くとき、脚を下にする。日本人は脚を上にして置く。（炉や火鉢に置くごとくに注目したのだろう）
- ・ 我々の料理はパンの外は覆いをかけて運ばれてくる。日本では反対で、米飯だけが覆われる。
- ・ 我々の間では招待を受けた者が招待した者に礼を述べる。日本では招待した者が招待された者に礼を述べる。（茶席の作法について述べたものと思われる）
- ・ 我々の間では戦争のときに横笛、太鼓または立派なトランペットを奏する。日本人は響きのよくない、しゃがれた法螺貝を使うに過ぎない。
- ・ 我々の書物の最後のページが終わるところから、彼らの本は始まる。
- ・ 我々は糞尿は取り去る人に金を払う。日本ではそれを買い、米と金を支払う。
- ・ ヨーロッパでは言葉の明瞭であることを求め、曖昧な言葉を避ける。日本では曖昧な言葉が一番優れた言葉で、もっとも重んぜられている。

といった具合で、これらの事例からわかるように、日本人の何気なく行動する様が、フロイスの目には

ホーム <http://biwahonpo.jp/>

異様に映っていたようです。

### 疑わない口伝文化 疑わしい文字文化

・・・その男がどこで聞いてきたのか、狐に油揚げをやったら、たいへん金儲けをさせてくれる、絶対間違いなし、手をのばしたら金のずいを握ることができると言い出した。・・・それを聞いた三人は油揚げにした二匹の鼠を金網に入れて、その夜のうちに横谷をたつて上の原まで歩いた。一人はかかの着物を着ている。一人はらしゃの厚司（厚くて丈夫な綿織物）、一人はテッコウ（手の甲を覆うもの）を着ていた。支度はいたって粗末である。さて上の原で待っていたが、何も来ない。少し山の中を歩いてみようということになって歩き回ったが何の事もない。そのうちに夜が明けてきた。見ると着物は木にひっかかって方々ぼろぼろやぶれている。あまりの姿なので大道をのこのこと歩くわけにもいかないの、墓原の中にかくれていた。そこへ墓参りの人が来て、怪しい者がいるからと警察に届け出た。そこで巡査がたくさん来て三人を取り押さえ、警察で調べると、この次第である。巡査もあいた口がふさがらなかったという。

これは昭和初期に日本各地をくまなく歩き、伝承文化の聞き取り調査をした民俗学者の宮本常一が書いた『忘れられた日本人』に出てくる一節です。

ここに登場する三人は字を知らなかった。文字のない世界には共通したこのような間の抜けたものがあつたのだといいます。

見知らぬ世間の人にはできるだけ信用しないようにしつつ、疑うこともしない。疑うときりがないのだから。そういう中であっては、人は疑うと生きてゆけないものだった。文字のない世界はそれだけにまた、人間も間の抜けたような気楽さと正直さがあったのです。

一方、昔の文字文化は変わることが多いのだという。『悪女論』などシリアスな題材をモチーフに、女性をとりまく中世日本文化史を批評する、国文学者の田中貴子さん。中世の書物を紐解く時に心得ておかなければならないことは、「書く」ということ自体、書く人の主観が入っており、後世の人たちが書写される度に、そのときの時代観で偏見があることを前提としなければならないこと。中世文学の読み解きは、自分も含めて複数の主観や時代観をどのように扱うかが問題になるというのです。つまり、それを読む人は書いた人ではないことを意識しなければならないということでしょうか。

その点、昔からの口伝文化は多くの言い伝える人とまた多くの聞く人がいる。聞いた人が次の誰かに聞いた話を伝えます。複数の人の間で、それぞれに聞いた話に相違点があると語り合うとすぐわかる。

伝承文化のなかで、口伝よりも文書伝達のほうが正確であるかのように思われますが、あながちそうでもないようです。



## 身体は元から完全！？

浄土真宗開祖の親鸞聖人は晩年『教行信証』という書物を残しています。自説の証明を大陸のたくさんの方の書物から引用するなど、実に論理的です。

ところが諸種の現世利益を説く場面では、「利益は真の念仏者であればおのずから備わるものであり、念仏者が自ら願って求めるものではない」としている。

えっ！求めちゃいけないの！？病気や寿命に関していえば、健康や天寿は備わっているものであって、お願いしてなんとかしようはダメだと・・・。

当時は僧医と民間医が併行して病気治療にあっていたといいますが、実際は加持祈祷療法と自然療法の折衷ですから、医療といっても現代と比較にはなりません。厳しい現実がそこにあるだけ。

それでもご利益はすでに自分にいただいている。それ以上の利益をどうして求める必要があるのかということをおのづから伝えたかったのでしょうか。

当時の身体感からすると、元の身体は完全であって、病気は何らかの不調和が現象としてあらわれているものという哲学的・宗教的理解が必要だった。当時の病名をみても、病気をみるというより、現象をみているように思います。

【クイズ】次にあげる中世日本での病名を、今の病名に直しなさい。

い：加之良以太木也万比（カシライタキヤマヒ）  
ろ：久知由賀死（クチュガム）  
は：倍止都久（ヘドツク）  
に：阿之及介（アシノケ）  
ほ：古々路万都比（ココロマドヒ）  
へ：岐波死夜万比（キバムヤマヒ）  
と：之利與理久智與理古久夜万比（シリヨリクチヨリコキヤマヒ）  
ち：米久流米久夜万比（メクルメクヤマヒ）

い：頭痛 ろ：顔面神経痛 は：嘔吐 に：脚気  
ほ：失神状態 へ：黄疸 と：急性胃腸疾患（嘔吐下痢症）  
ち：眩暈（めまい）

さらに疫病においては、「朕が不徳によるもの」であって、徳政をもって疫病を封じ込む以外にないと考えていました。賑給という慈悲的な救貧対策として、富裕な者から私財を出させて公的救済を代替させ、百姓の租賦を減免し、農民相互の扶助、共同体の存続と治安をはかる政策がとられています。『続日本紀』によれば、国司がその状況を検量して、穀、糟、薬酒、湯薬などを支給していました。

病気の蔓延は徳政によって治めるものという論理は、一見不合理にみえますが、その政策面では根本的有効なものであったろうと思います。



病気は不調和であって、個体の問題ではない。疫病は個々人のものであっても、それは治世連帯の責任であるとみていた中世の日本。

だがしかし、それは過去の出来事とも言い切れない。現代日本の皆保険制度も、意味合いは違っても、結果的に個々人の病気を連帯責任で処理するという点においては同じであるといえます。

もともと身体は完全。わたしたちの思考や行動が病気になって現れるという考え方は、現代の生活習慣病や環境保全にもイメージが重なりますね。

## 病気は完全性の欠如

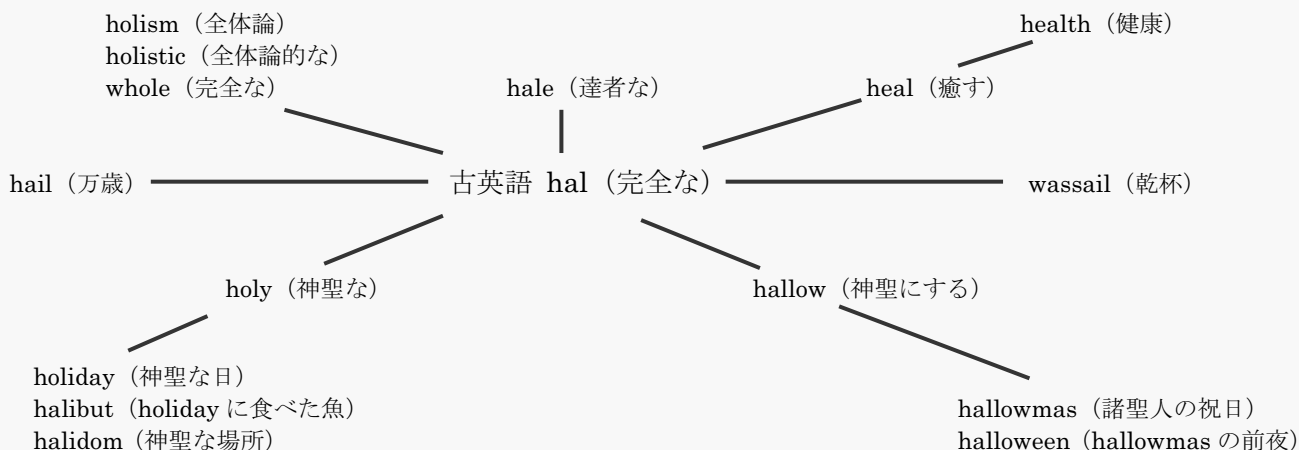
WHO（世界保健機関）憲章では、健康の定義として「完全な肉体的、精神的及び社会福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」ことが唱えられています。

なぜ「完全」なのでしょう？また、完全でないといけないのでしょうか？

完全な健康状態などあり得ないはずの人間が、完全を求める理由があった。それは「健康（health）」は古英語である「完全な（hal）」を語源にもつからだという。以下、古英語に詳しい長野県看護大学外国語講座[英語]助教授の江藤裕之氏の研究からみてみよう。

（作図・文、共に「長野県看護大学紀要 2002」より引用）

### 古英語 hal から意味的に広がっていく同属語（英語）の連鎖



health（健康）の根本義は全く欠けたところのない完全な状態で、その意味の背後には神話の世界における古代ゲルマン人の「完全なるもの：原初神」への崇敬があるという。したがって、hal から派生した holy（神聖な）、hallow（神聖にする）、hale（達者な）、heal（癒す）などの語はすべて完全なるものへのイメージが隠されている。

オックスフォード英語辞典 [Oxford English Dictionary] には、heal（癒し）の定義が、「to make whole or sound in bodily condition ; to free from disease or ailment, restore to health or soundness ; to cure of a disease or wound」[肉体的状態において完全、すなわち正常にすること。疾病等をなくして健康状態を取り戻すこと。病気や怪我をなくすること]と書いてあるそうです。癒すとは体を whole（完全な）状態にすることなのです。

**神⇒完全なるもの⇒健康…という！**  
**病気⇒不完全なもの…何が？**

さて、そこで病気とは？を考えると、答えは簡単。完全性の欠如が病気ということになります。

そうして病気の機序を「壊れる体と壊す外敵の存在を明らかにすれば、その本態が理解できるはず」と考えるようになってゆくのです。

## 原因はどこに？

・・・火山や地震の時に又は暴風などの際に、ともすると測候所などが苛酷に責められるのは困ります。身内を亡くした人などは、天災としても諦めきれない。自然に責任者を人間界に求めます。自分が朝財布を忘れて出勤して困ったときに、奥さんの注意が足りないからだと思ってしまうのは困った話です。よそで悪口を聞かされて、きっと嫁が言いふらしたに違いないと結論するお姑さまのようなものはもっと困ります・・・

大正時代から第二次世界大戦後にわたって活躍した気象学者、藤原咲平の著書は人間くさいものが多い。上記もその一編ですが、「原因を内に見ずして外に求める」・・・、今でもどこかで囁かれている情景が浮かぶようです。

責任者は誰か？病気の場合、神は完全なものなので、不完全なものを神に求めるわけにはいきません。必然、不完全なのは他の作用ということになります。

外に原因を求めることは、自分とは別の悪者を見つけることです。外でない場合でも体の故障が病気であって、見つかるまで悪者探しは続くこととなります。

悪者がいるから病気になる。天災か人災か、藤原咲平もさぞかし苦悩したことでしょう。

## 病気は外から？責任されないわたし

狂牛病問題や鳥インフルエンザのように、わたしたち生活圏内の生き物が、ウイルス感染によって人間を恐怖させている。生き物だけではない。機械も感染する。ウイルス感染したコンピューターから情報が漏洩したと、発表した警察が被害にあっているから洒落にならない。

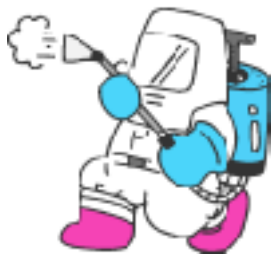
ウイルスや細菌は外から知らぬ間にしのび寄る。地球の反対からでもやってくる。防がねば、守らねば・・・。



余談になりましたが、医学史上うつる病気の正体が明確になるのは、近世ヨーロッパの時代からです。

エドワード・ジェンナー（1749～1823）が天然痘の種痘法を発見して以来、人体を冒す微生物の容姿が段々と解明されてゆきます。ルイ・パスツール（1822～1895）は白鳥のくちばしの形をしたフラスコの実験で、腐敗や発酵は細菌類であると証明、結論したのです。

これで悪者は明らかになった。悪いのは細菌やウイルスであり、わたしではないと言えるようになったのです。完全な健康のためには、悪者はすみやかに退治しなければならない。



先に述べたように、中世日本の『利益いただいた身体はすでにある。病気は自分たちの意識が原因で、病気平癒は自己のみならず共同体全体の調和による』という因果律に対し、ヨーロッパでは『病気は身体に完全性が欠如している。その原因はわたしではない外にある』とする考えがあらわれた。

現代は病気に対する考え方は様々でも、皆保険制度という全体で処理する日本の医療と、管理者である自己の責任とする欧米型の医療とが現実にある。

フロイスが生きていたら、どのように書き記すだろうか。

## 読み解き方を変えることが医学の進歩

わたしたちは病気を疑ったら病院へゆきます。診療する医師も血液や尿を採取したり、CTスキャンやMRI検査など、必要に応じて病気を疑います。

疑わないと治療が始まらない。出てきたデータを正しく読み解くことが欠かせません。

医学は常に刷新されてゆきます。新しい薬の発見、治療技術、検査機器やシステムの改善など。しかし、本体の人間は今も昔も変わりありません。昔の人の血液や尿や細胞が、今の人とどれだけ違っているでしょうか。

つまり、新しくなっているのはデータの読み解き方が変わっているのです。医学の進歩とはおおむねそんなところですよ。

なんだか中世日本文学の読み解き方と似ていませんか。読む側が変わると、見えてくる内容が変わるのだと・・・。



## 信じる医療があってもいいじゃないか

文字のない世界では、信用こそしなくとも疑わないう生き方があった。時折、間抜けで正直な失敗もあったろうが、それも笑い話で済ませられた。

口伝の文化はそうした中、普遍で不変なものだけが語り継がれていると思う。

そもそも自然科学は開放性を持っている。いいコトは自然と皆がそうするようになるし、次に改良するものも出てくる。口伝で伝わることならば、なおさら普遍的に使えるものしか残りはないはず。

疑わないがゆえに、時折ちょっと間抜けで正直バカをみることもある。合理的ではないかもしれないが、少しはそんな笑える程度の“信じる医療”があってもいいのではないだろうか。

